
優しい神だからこそ知っているセカイ

冬馬(とうま)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

優しい神だからこそ知っているセカイ

【Nコード】

N2525X

【作者名】

冬馬^{ふゆま}

【あらすじ】

この物語は原作「神のみぞ知るセカイ」を元にして考えた2時創作品です。

いわばコピー小説です。

嫌いな方はブラウザバックで戻りましょう。

プロローグ「物語の始まり」

「この問題を解いてみる、桂木」
「はい」

教室での授業。

教科は国語で担任である二階堂先生が僕に問題を当てる。

「どうして筆者が女の子の居場所が分かったのかというと、それは筆者が女の子の幼馴染で彼女の考えることが分かるからだと思います」

「大体そんなところだ。だが、もうちょっと付け足すとするとここでは筆者は女の子の母親に一旦居場所を聞いている事から」

僕がそう答えると二階堂先生はそう言って模範回答を言った。

ある程度、ノートをとる時間を与えると先生は黒板に文字を書き始め次の問題に進めて授業を続けた。

プロローグ「物語の始まり」（後書き）

読んでいただきありがとうございます

引き続き、読んでくださると嬉しいです

他にもきやめるそーだを書いているのですが、考えがうまくまとまらずにこんなものを書いてしまいましたw

FLAG 01 努力…

僕の名前は桂木桂馬。
かつらぎ けいま

6月6日 11時29分35秒生まれ 17歳。

身長174cm 体重53kg…。

以下省略。

好きなものは女子。

僕くらいの男の子だったら当然さ。

「桂木ー!!」

廊下を歩いていると大声を出しながら猛スピードで走ってくる女の子がいた。

ドコッ。

「悪い悪い。スピード出しすぎてブレーキの限界超えてた」

そう言って片手を立てて謝る女の子。

彼女は2年B組の高原歩。
たかはら あゆみ

僕と同じクラスの女の子だ。

「ねー桂木、今日屋上の掃除やってよ! 今日掃除当番私とあんたじゃん? でも私、あんたと違って忙しいからさ」

手を貸して立たせてあげると高原はそう言った。

「僕は暇人か？僕にも僕の時間があるんだ！忙しいなら他にも手はあるだろう！」

「例えばどんな方法があるのさ」

「例えばいつもより雑でいいから早く終わらせたり…。他の人に手伝ってもらったり、代って貰ったり。色々あるだろう」

僕がそう言うと、高原は納得してくれたらしく一緒に屋上の掃除をやる事を決めてくれたらしい。

「そうと決まればチャチャッと終わらせるからね、桂木」

「そう言ってる割にはさっきから細かい所ばかりやっていないか？」

「き、気のせいよ。はい！おしまい！」

僕が屋上のベンチの下を5分以上掃除しているので高原にそう言う
と高原はあっせった様に返事をして無理矢理掃除を終わらせて校舎
の中に入って行った。

僕は高原が置いて行った掃除道具をロッカーに入れて買える支度を
してグラウンドに向かった。

「これからハードルをするのか？」

ハードルを持ってグラウンドの上を歩いている高原に聞く。

「まあね、一応陸上部だし…」

高原は少し顔を上にあげながらそう答えた。

「そうか、なら僕が持つてあげるよ。そのハードル」

その後、僕はハードルを用意してあげると高原は顔を赤らめながら位置を細かく指定しつつも楽しげに笑った。

「桂木、ありがとね」

「ん？何か言ったか？」

「別になにも…。あ、…明日、大会の選手決めでタイム測定があるんだけど良かったら見に来てくれないかな？」

「…分かった見に行く…」

そう言っ僕はセットし終えたハードルを背に向けて手を振って帰る。

ー翌日…の放課後ー

「来てくれたんだ、桂木」

「ちょうど暇だったから…。それにさっそってくれたんだから別に来ても大丈夫かなって思って…。ダメ…だったかな？」

高原は僕の言葉を聞くと嬉しそうにこう言った。

「これから本気で走るから…。ちゃんと見ててよね」

「分かったよ…」

そう言っ高原は笑っ走っ行った。

「よっっし、本気出すぞー」

高原はそう言うのと髪を左側にくくって靴紐を結び直して走る準備を始めた。

「位置について！、よいい…ドンッ！！」

着々と高原の番が近づきいよいよ次になった。

「頑張れよ、高原」

無意識にそう呟いているのに気づいた僕は少し恥ずかしくなってしまったが、『バン』とスタートのピストルの音がしたのに気づいて顔をあげて応援した。

結果は代表に選ばれてこれまでよりもっと練習をする様になった。

毎日毎日、グラウンドで必死に走っている高原を僕はただ教室の窓から見ていた。

―大会前の平日の放課後―

今日も高原はグラウンドでハードルの練習をしている。

流石にそろそろ帰らないと校舎が閉められてしまうので教室を出ようとした時、グラウンドから鈍い音になった。

急いで窓の外を見てみるとそこには、ハードルと一緒に倒れている高原がいた。

しかもいたそうに足を抑えて…。

「大丈夫か？高原！」

保健室のベットに座っている高原に足には包帯が巻いてありとても走れる様な姿では無かった。

「捻挫だってさ。明日、大会なのに…」

高原は悲しそうな顔でそう僕に言った。

『残念だったな…』と言って僕は保健室を後にした。

FLAG 01 努力…2

―その日の夜―

「どうしたのよ、桂木。一体なんの様があってグラウンドに呼び出したの！？しばらく私にはここには用ないよ！しかも呼び出しの手紙が乗っちゃったこれ！！嫌味！？こんなもん貰って喜ぶわけないでしょ」

高原はバスケット一杯に入ったフルーツの上に乗っているお見舞と書かれた紙を指差して言う。

因みにこのお見舞いは他の陸上部の人に持って行って貰った。

「それを食べて元気だして。僕は高原に明日の大会に出てもらおうと思って」

「この足を見て言え！！こんな足で大会なんかに出られると思うの！？」

バスケットに入っている果物を投げつけながら高原は言う。

だけど…。

「思う…。だって怪我なんかしていないんだから。ハードルで転けたくらいで怪我なんてしないよ」

「走った事無いくせに、スピード考えてよ！！」

高原は次第に声の大きさが上がり始め、果物を投げるのを辞めた。

「確かに…、全速力で走って転倒したら危険だよ。でも…、あの時の高原は全力で走っていなかった」

「な、なんで分かるのよ。そ…そんな事…。み…見ていなかった癖に…」

急に小さくなったように小さな声で高原は話す。

「髪、くくってなかった…って聞いたんだよ。陸上部の人に」

そう言うとき高原は『はっ!』として頭に手を置いて髪触った。

「本気を出す時はいつもくくってたよね。もしかして…：最初からコケるつもりだった？」

そう僕が言うと、高原は支えを離して自分の足で地面に立った。

「…これで良かったのよ。先輩たちもこれで大会に出れる…。先輩たちの言うとおりでよ。先生の前でたまたま走れちゃって選手になっちゃってさ…。ずっと練習してたんだけど…、なかなかタイムも出ないし…。私なんか…：私なんかでない方がいいんだよ」

泣き始めてしまう高原に僕は言う言葉が出ずに黙ってしまっていた。

「どうして…：、走れなくなっちゃうのさ…：こんなに練習してるのに…。もういいの…：ビリになったら…：おしまいだもん」

「そんな事はない！一生懸命走ったら、それでいいじゃないか。順位なら、高原、君がとくに一番をとってよ。僕の中で」

僕はメガネを外しながら高原に言う。今言う事のできる言葉を。

「ば、バカ！何変な事言ってるのよ！！大体あんたが全然見にな
いから…」

「僕はいつも高原の事を見ていた！教室の窓からだけど、毎日欠か
さずに！！」

「うっさい！！」

高原は再び果物をバスケットの中から取り出しながら僕に投げつけ
てくる。

途中バスケットの中に入っているものに気づいた様で高原は果物を
投げるのを辞めた。

そして高原はそれを手に持って僕の手を握りながらこう言った。

「来てくれる？…明日も応援に来てくれる？」

上目遣いをしながら高原は僕にそう聞いてくる。

「う、うん」

「……………ありがとう」

高原はそのまま背伸びをして僕の唇と唇をくっつけた。

その後、高原は先生に本当に事を話して大会に出場しぶっちぎりで
優勝した。

「みて！桂木。私、新聞載っちゃったよ！」

「おめでとう」

「あ、ありがとう！み…見に来てくれて…。それと…あの事は私と
桂馬だけの秘密だからね…」

そう言って高原は教室を出て行った。

FLAG 02 これからの事と未来は同じ

「これでいいのか？エルシィ」

僕は家に帰り1階の店で手伝いをしている女の子に言う。

「高原さんの駆け魂は無事に勾留しました。次の駆け魂なんですけど…」

エルシィと呼ばれる女の子の首元にはマフラーのようなフワフワした羽衣を巻いて、服装は一昔前の女忍者の様な格好をしている。エルシィ曰く、羽衣は悪魔にとってとても便利な道具らしい。

何故、僕の家に悪魔であるエルシィが当然の様に居るのかと言うと、それはほんの数日前の出来事…。

僕はいつものように朝、ポストから新聞を取り出した。ポストには新聞以外に封筒も入っていて宛先をみると…。

「…僕宛？」

封筒の中には手紙が入っており、その手紙の表にはただ1文『あなた様の自身の持っている力を試したくはありませんか？』とだけ書かれており、裏には『自身がないならあけるな』と書いてあるだけだった。

封筒の送り主は『ドクロウ・スカール』と書いてある事から誰かのイタズラだと思い僕はその手紙をあけた。

バチイバチイツと手紙が燃え始め大量の煙が発生した。

「な、なんだ！？一体何が…」

僕の言葉は誰にも聞こえないはずなのに、その言葉に返事が帰って来た。

「転送です、神様。もうしばらく待ってくださいね。すぐに終わりますから」

この部屋には僕しかいなかったはずなのに女の子の声が聞こえる…。手紙から発生した煙いの中から…。

次第に煙が晴れて来て姿が見えるようになって、そこにはホウキを持った女の子が立っている。

僕はその現実を目の当たりにしながらも無意識のうちに彼女に声をかけた。

「お、お前は…誰だ…何者だ…」

すると彼女は元気一杯に答えた。

「私、エリュシア・デ・ルート・イーマと言います。みんなはエルシイと呼んでます！地獄から派遣された『駆け魂隊』の悪魔です！」

……………。

「さて、今日は休日だしそこらへんでのんびりと散歩でも…」

僕はそういいつつ自分の部屋から出ようとするとエルシィはギュッと袖をつかんで来た。

「気をつけてください!!首、取れちゃいますよ?」

エルシィが言った言葉の意味が分からずに僕は無意識に『首?』と言いつつ自分の手で首元を触ってみる。

「な、なんだ。この首輪?」

首元には僕の首にピッタリとくつついて動かない首輪がつけられていた。

「神様は、悪魔と契約されたんですよ。契約書が来ましたよね。室長のドクロウさんから」

ドクロウさん……どこかで見たような……。む、むむ……あ……あの手紙か!?

「地獄の契約は厳しいのでご注意ください。もし、契約を達成できなかったり、許可なく破棄したりすると……その首輪が作動し、首をもぎ取ります。し、しかもその後首が……キャー言えません!!」

「言えよ!何だよその後!!そこまで言っておいて最後の所は言わないのか!?!つか、そもそもこれをはずせええ!!」

「大丈夫ですよ。駆け魂を捕まえれば外せます」

どこか恐ろしい笑顔を僕に見せながら言うエルシィ。

「かけ……な、なんだそれは!?!」

「『駆け魂』とは地獄から抜け出した悪人の靈魂のことです。死んでも悪人は悪人！奴らは再び地表で悪事を働くべく地獄の罫いを抜け出して地表へとやって来るのです！！しかも、『駆け魂』を捕まえるのは非常にこんなのです。何しろ、極めて特異な場所に隠れてしましますので…」

「特異な…場所？」

「人の心のスキマです！そこが駆け魂の隠れ処なのです！！」

「心のスキマ？捕まえようがないだろそんなの？」

し、しまった…。つい面白そうな話だったから話にのってしまった…！

「はい！そこで人間の協力者^{バディ}の出番です。心のスキマを埋めてしまえば、駆け魂は居場所がなくなり出てきます。そこを私、悪魔が勾留するわけです」

「大体の流れは分かったが…一体どうやって人の心のスキマを埋めてやるんだ？」

「心のスキマを埋めるには恋が1番！！神様の力で心のスキマを埋めてもらいたいのです！！」

グッと手を握って笑顔で誘ってくるエルシィ。

「ま、待て…。僕に女の子を恋に落とさせて言うのか！？」

僕が必死になって言うと、エルシィは急にモジモジし始めてこう言った。

「えっ、まあ。ほどほどに。口づけ程度でいいので…」

「バカヤロー。お前はとんでもない勘違いをしているぞ！僕は女の子と付き合った事がない！！」

僕は堂々言ったが良く考えてみると恥ずかしくなっていていい終わった後顔が赤くなっている事が自分でもわかる位体があつくなくなった。

「大丈夫です、神様！私は神様の力を信じてます！！ですが…契約は対等、協力者が悪魔に首も飛びますから。死ぬ時は2人一緒です」
「……分かった…頑張る…。それで、お前はこれからどうするんだ？」

一旦落ち着いて考えをまとめているとふとある事に気づく。

「どうするって？」

「これから住む所とかの事だよ。お前はさっきこっちに来たばかりみたいなこと言ってたけど大丈夫なのか？って言ってるんだ！」

「それなら大丈夫です！神様と協力しやすい様に室長に頼んで色々『手続き』してもらいましたから」

そう言うとエルシイはどこからともなく1通の手紙を出して来てそれを持って僕を連れて1階に降りる。

「私、ここのお父様の隠し子です！これ…私の死んだ母からの手紙です…」

エルシイはさっき出した手紙を僕のお母さんに手渡しながら言う。
すると、お母さんは髪留めを外しながら電話をかけ始める…勿論、お父さんに…。

「うん、私よ。話、聞かせてもらおうか？なんの話！？自分の下半身に聞け！この外道！」

電話でお父さんと話しながらお母さんは1階である店ん1中で大暴れしている。

エルシイはそれを見て声にならない声で僕に言っているので、僕は答える。

「うちのお母さんは元暴走族」

僕がそう言っていると電話が終わった様で、お母さんが僕とエルシイのもとに来た。

「桂馬！父さんの事は忘れな！もう奴は死んだ！安心おし！あんたら兄妹の面倒は私が見る！！」

この様にしてエルシイという悪魔はうちにいる事になったのだ。

「高原さんの駆け魂は無事に勾留しました。次の駆け魂なんですけど…」

エルシイは当然のように次の駆け魂の話をし始める。

「は！？もう僕は駆け魂を捕まえただろう！なぜまだこんな事をしなくちゃいけないんだ！」

「まだ契約は終わってません。1匹駆け魂を捕まえただけです…。この街にはまだ…駆け魂が沢山忍んでいます」

「まさか、この街中の駆け魂を集めろってか！？」

街中だと…冗談じゃない！

だが…首輪はどうする…。

「だから、神様の力になれるようにこの家に住めるよう手続きしてもらったんですよ」

「おかげで僕のお父さんは死んだ事にされたがな……。しかし、この首輪がある限りお前と僕は縁を切る事ができないからな。となると、この状況で1番ベストな方法はお前と僕で駆け魂を捕まえまくって契約を終わらせる。そのために僕らはずっと一緒にいるんだ」

僕が出した答え。

こうして今日も駆け魂を捕まえる為に僕は行動するのだ。

FLAG02 これからの事と未来は同じ（後書き）

急に終わらせてしまい誠に申し訳ありません。

リアルで忙しくなってしまう、まともに考えることが難しくなってしまう為にここで終わらせていただくことにしました。

今までありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2525x/>

優しい神だからこそ知っているセカイ

2011年12月3日00時54分発行